

# 青森県八戸市におけるイタコの実態と観光資源としての活用事例

山崎福太郎

## 1. はじめに

青森県南部地方の女性視覚障害者の口寄せ巫女イタコについては、昭和40年代頃から注目されはじめ、多くの研究がなされている（例えば小林，1967；青森県，2001）。かつて中世から昭和50年代まで全国各地や新潟県に確認された、三味線や唄を携えて巡業し生活をしていた女性視覚障害者である瞽女（こぜ）は、社会からの需要低下に伴い、現在その姿を確認することはできなくなった（鈴木，2009）。瞽女のようにイタコの姿も減少してきており、今日その数は減少の一途をたどっている（青森県，2007）。イタコと呼ばれる人々は現在どのように活躍し、生活しているのだろうか。イタコの修行形態と活動実態を捉え、それと同時に現代を生きるイタコの姿を明らかにする。

## 2. 調査内容・方法

調査地域は八戸市とむつ市恐山菩提寺とし（図1）、聞き取り・文献調査を行った。イタコの修行形態や恐山とイタコの関係、イタコの人変遷については八戸市図書館等の既存研究資料を整理した。また、今日におけるイタコの活動実態を把握するため、八戸市内在住のイタコに口寄せを依頼した。また、イタコを観光資源として活用していた八戸市観光コンベンション協会に、恐山菩提寺においては口寄せを求め

て訪れた利用客と蓮華庵（食堂）従業員に聞き取り調査を行った。

## 3. イタコと恐山

既存研究と現地での聞き取り調査を元に、イタコと恐山の関係について見ていく。

恐山とは特定の一つの山を指すのではなく、釜臥山（878m）をはじめとする外輪山に囲まれた直径約4kmのカルデラ地帯の総称である。直径2kmの宇曽利山湖が存在し、その北岸には多くの硫気孔が存在し、ガスや温泉が噴出している（図2）。1810（文化7）年『奥州南部宇曽利山釜臥山菩提寺地藏大士略縁起』においてこの地域を「現在地獄相を見聞するより諸人恐怖せるを以恐山と称す」とあることから、江戸時代から景色自体が地獄の様相を呈していたことが窺える。明治中期には江戸時代以来続けられていた硫黄採掘が大規模化し、宇曽利山湖の湖面が低下、亜硫酸ガス噴出が増加したため北岸地域の樹木が大量に枯れてしまったことで外輪山の緑と荒涼とした地獄との鮮明な対比がより一層強くなり、現在に至っている。

恐山の開山は円仁（天台宗）によって貞観元年から6年間（859-865）に開かれたと伝えられる。後の兵乱で焼け、1530（享禄3）年に八戸南部（根城南部）氏の庇護により、曹洞宗円

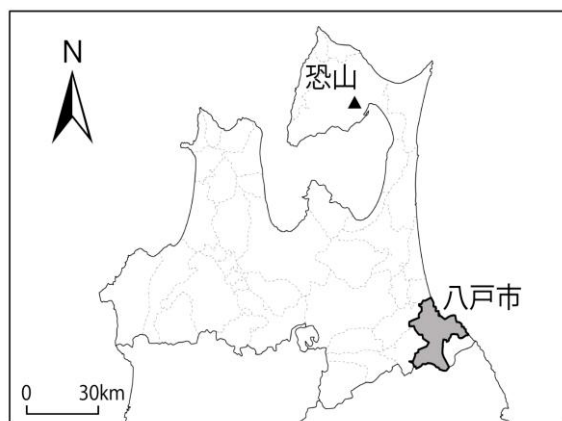


図1 調査地域概要図



図2 恐山の位置関係（地理院タイル（色別標高図）を加工して作成）

通寺の聚覚によって再興され現在の菩提寺が置かれた(図 2, 3)。下北半島を中心に「死んだらオヤマさ行く」という伝承が残っている点からも、恐山は民間信仰と霊場修験の場として整備され、民衆の想いを集めていたといえよう(小林, 1967)。

口寄せを行うイタコ達が恐山に集まるようになったのは明治 20-30 年代であり、廃仏毀釈による寺院離れから青森県内に存在したイタコや家の神であるオシラサマ信仰を、寺院の大祭と関連づけたことがきっかけとなるとしている(小林, 1967)。現在における菩提寺の立場はイタコと寺は無関係であり、寺に所属しているイタコは存在せず、場所を提供しているのみである(南, 2012)。

7 月 20-24 日の恐山例大祭、10 月上旬の連休に行われる<sup>あきまい</sup>秋詣りがイタコの登場する機会であり、参拝者の依頼で口寄せを行っている。そのため、イタコは恐山に常駐しているわけではない。調査時(2014 年 9 月 26 日)には境内休憩所にて宮城県から来たイタコが 3 日間口寄せを行っており、東京から親族の口寄せを依頼に訪れた参詣客の姿があった(図 4)。祭り当日は菩提寺総門入って左側の土塀にイタコ一人一人がテントを張り、口寄せを行う「イタコマチ」が行われ(図 5)、口寄せを求める人はそれぞれテントの前に並んで順番待ちをする。1970 年代にテレビや週刊誌等においてイタコの存在が取



図 3 恐山菩提寺(筆者撮影)

り上げられたためイタコに対する需要が高くなり、1972 年の例大祭には 10 万人以上の参詣客が訪れ、30 人のイタコ達に降霊を依頼した。この時は朝 6 時から夜 7 時まで休憩はほとんどなしで行われ、1 日に 70 人を「口寄せ」したとさ

れる(『デーリー東北』, 1972)。だが、現状は 2014 年に開催された例大祭でイタコマチを実施したイタコは 3 名であったという。このように口寄せを行うイタコの数が減少している事実は、既存研究や新聞記事における報告で例大祭にやって来るイタコの人数の推移を確認するとより明らかになる(図 6)。

#### 4. イタコの実態

先行研究と現地調査を踏まえ、八戸市を含む青森県南部地方と岩手県北部旧南部領地域に住む南部イタコと呼ばれる者達が、イタコを職業として選択する契機やイタコの師弟関係、一人前になるまでの修行内容、口寄せの様子を調査した。

##### 4. 1 イタコとなる契機

イタコとなるのは原則的には目に障害をもつ女性である。当該地域においては目に障害を有した女兒がいると、若いうちに師匠となるイタコに弟子入りしてイタコとしての技能を習得し、その技能をもって一生の生業とすることが



図 4 菩提寺境内にて行われていた口寄せ(筆者撮影)



図 5 イタコマチが行われる恐山菩提寺境内(筆者撮影)

一般的であった（松田，2013）。「イタコにならなければ生きる道はなかった」と証言する年配のイタコの声があるように、視覚障害を有した女性の選択肢はイタコに限られていた（青森県，2001）。だが、現在活躍する40代のイタコは目に障害はなく、イタコになることを自ら選択した者もいることが分かっている（松田，2013）。

#### 4. 2 弟子入りと師弟関係

イタコになるためには師匠について修行することが不可欠とされる。東北地方には師匠につくことなく、自身の降霊体験や神からのお告げにより宗教者となるカミサマと呼ばれる者が存在するため、この師匠の元での修行の有無はイタコとカミサマを大きく区分する要素となる。弟子入りする師匠の選択は親戚や近所の人間関係を通じてなされることが多く、結果として自宅から近場のイタコを師とするのが通例であった。かつては南部地方における女性視覚障害者の職業選択肢としてはイタコとなることが主流であったが、現在では新規の弟子はほとんど確認できていない。その理由として医療技術による目の障害の減少や盲学校にける盲教育の充実と、それに伴うイタコ以外の就業の場の拡大などが指摘されている（青森県，2001）。

#### 4. 3 一人前になるまでの修行内容

弟子入り後の修行は師匠宅に住み込んで行う場合と通いで行う場合の二通りであり、一般に

は師匠宅で家事手伝いをする合間に口述で修行が行われた。修行で覚える内容は儀式作法や道具の扱い、巫歌や経文・祭文・祝詞などの文句であった（青森県，2001）。その具体的な修行方法は、一対一の口伝で祭文や経文を師匠が一節唱え、それを弟子が復唱し覚える形で行われていた。昼間は師匠の元へ口寄せや祈祷の依頼者が来訪してくるので、修行自体は一日の稼業が終わった夜などが専らであったという（松田，2013）。

修行過程においては覚える順序が存在した。師匠の系譜によっても異なるが、南部イタコ根城すゑ氏の場合、はじめに“えべす”“九条 錫杖”“仏説地神経”“山伏”“あげおろす”で構成される「えべす大事」と呼ばれる経文を習得した。この部分の習得が済むと神にお断りし、ユルシ（習得を師から認定）を受けた後、門付けすることが許された。次に「口寄せ大事」として“神寄せ”と“地獄探し”を習った。「口寄せ大事」のユルシが出るまでは魚や鶏、牛、馬などは食べられなかった。これと並行して“呪い”“祓い”“占い”と東北地方で家の神として信仰されているオシラサマを祀るための儀式“オシラサマ遊ばせ”を習うが、順序は決まっていなかった（青森県，2001）。

#### 4. 4 師匠上がりの修法

イタコの修行期間は弟子入り時の年齢や個人的資質に左右され、おおそ半年～3年程度で

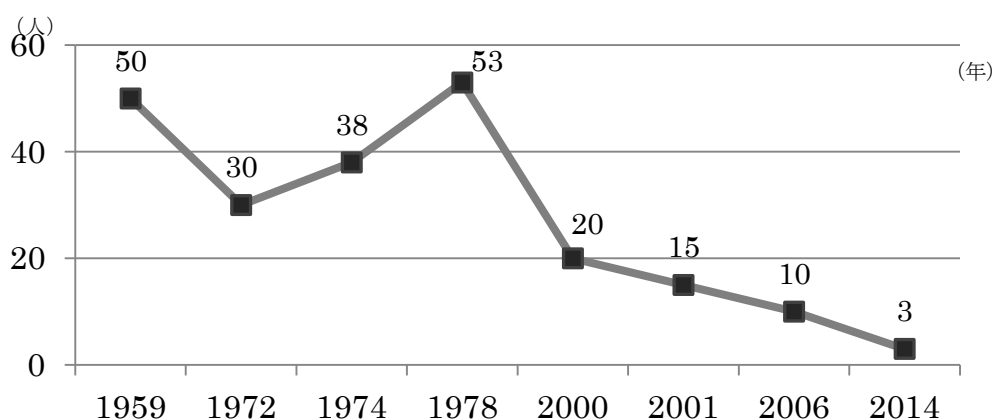


図6 例大祭に訪れるイタコの推移（『デーリー東北』，1972；『岩手日報』，1988；『デーリー東北』，2000；加藤，2003；青森県，2007；現地聞き取り調査から作成）

あった。また、修行の最終段階にそれまでの修行で伝えられた事項の確認のため「師匠上がりの修法（ダイジュルシ）」が行われ、これを済ますことで初めてイタコとして認められるようになる。中居林まつゑ氏の「師匠上がりの修法」の様子が報告されている（青森県，2001）ため、その内容を紹介する。

中居林氏は4歳で麻疹が原因で失明し、15歳のとき（1942）に通っていた盲学校校長の紹介で根城すゑ氏に弟子入りし、約1年間の修行の末、16歳で（1943年8月17日～24日）「師匠上がりの修法」を実施している。

中居林氏の自宅の一室を行屋とし、師匠と弟子は白装束をまとい1日3回水垢離<sup>みづかじ</sup>を行い、その部屋に籠<sup>かご</sup>って寝泊まりをした。行屋の中は注連縄<sup>しめなわ</sup>が張り巡らされ、部屋の奥にはイヅコ<sup>いずこ</sup>のように編まれた藁の縁に椿・青木・榎木・ヒバ・柊・ネコヤナギの七種の木が飾られていた。その前には机が据えられ、御幣が7本立て、側には弓矢が用意されていた。また米や麦大豆などを四斗俵にそれぞれ入れ、米はまた別に八斗俵が2つ用意され、賽銭も供されていた。

このような空間で「師匠上がりの修法」が執り行われ、この期間に今まで習った巫歌や経文を復習し、奥義とされる祓いなどが伝授された上で「口寄せ大事」のユルシの儀式が行われる。

式の最後に弟子は積まれた四斗俵の上に錫杖を持って手を合わせ座り、師匠は弟子が一人前になったことを神に報告し、今後の安泰を願い、礼を述べこの修法は終了する。

「師匠上がりの修法」が終わると中居林氏は数珠やオダイジ（図7）を師匠から授けられ、イタコの仕事を始める旨を名乗り、オシラサマを持って親戚や知り合いの家を七軒回って歩いた。この儀式を「七軒もうす」と呼び、これが終わると一人前のイタコとなった。以上のような修行段階を踏むため、長年修行していても「師匠上がりの修法」が習得できないためにイタコの道を諦める例も時折見受けられたという。

また、松田氏自身の「師匠上がりの修法」についても報告がなされており（松田，2013）、松田氏は幼い頃から熱が出るとイタコの元へ通

い、お祓いをしてもらうなど身近なところにイタコが存在する環境下で育った。晴眼者ではあったがイタコの職に憧れ、高校生で林ませ氏に入門。入門後1年で「師匠上がりの修法」を執り行った。修法の期間はかつて1～3週間だったが、松田自身は3日間であった。水垢離を1日3回、般若心経と五体投地を108回行うことで放心状態（トランス状態）となり、師匠から「ユルシ」が出れば一人前のイタコとなった。一人前の証としてオダイジと呼ばれる守り筒（図7）と数珠を師匠から経文を唱えて魂入れをしてもらい、授かっている。

#### 4. 5 口寄せの様子

一人前となったイタコが取り扱う仕事は大別すると4種類になり、①霊を降ろす口寄せ②体の不調やトラブルを取り除くお祓い③オシラアソバセ等の神事・儀式④人やイエの占い、である。①②では経文を唱え、③④では祭文を用いて執り行う。このように場面場面において必要な祭文・経文があるためイタコとなるためにはこれらを覚えなければならなかった。

今回は実際に①の口寄せを八戸市内在住のイタコに依頼した。その時の様子を、時系列を追って紹介する。

##### 4. 5. 1 依頼まで

八戸市内にはイタコの自宅や連絡先を示す看板が見受けられた（図8）。電話番号に連絡をするとイタコ本人が対応し、何をしてもらいたい



図7 師匠上がりの修法後一人前の証として師匠からもらうオダイジ（守り筒）（松田，2013より引用）

<sup>1</sup> 幼児をいれる、藁などで編まれた大きな容器

か（口寄せかお祓いか）、口寄せなら誰を呼びたいのか、日時はいつか等のアポイントメントを取り、自宅へ伺った。

#### 4. 5. 2 口寄せがはじまるまで

当日自宅に向かうと、祭壇が設けられた一室に案内された。部屋自体は普段は居住スペースとして使用している様子であり、祭壇は高さ2 m程であった。口寄せを始める前に口寄せをしたい人と話をしたい理由を述べ、口寄せをしたい人の没年月日、死因、家族構成を伝えた。その後祭壇に置いてあるノートに依頼者（筆者）の名前、住所、電話番号、年齢、呼びたい人の名前を記入した。その後祭壇に向かって口寄せしたい旨をお願いすることと、口寄せの際に名前や住所等を読み上げる場面があるためその際には尋ねるので答えてくれと依頼された。

イタコは簡易な袈裟を着て背中にオダイジと呼ばれる道具を背負い、手には長い数珠を持ち、祭壇の前に座っていた。依頼者はイタコの右隣にイタコ側を向いて座した。

#### 4. 5. 3 口寄せの儀式的流れ

まず天照大神からはじまる日本各地の神仏の名を挙げた後、口寄せをしたい人の名前、没年月日を読み上げ「遠く長野からわざわざ青森のイタコのもとまで会いに来てくれたので、どうか会わせてあげてください。力を貸してください」と神仏に対して依頼をした。その後、般若心教を読み、経文を唱えた。これと同時に数珠

を両手にかけて回し始め、数珠が擦れる音が次第に大きくなるとイタコはうつむき、数回唸りながら顔を上げると「遠く遠方からまで良く来てくれたな。ありがとう。イタコの口を借りて話するけれども、姿は見せて会うことはできない。お前に会いたかった。よく来てくれたな」と口寄せを依頼した人の言葉を語り始める。言葉は東北弁であった。

イタコは筆者が出生した時の様子や臨終際に会いたいけど会えなかったことを語った。その後、「何か話してみなければしてみなさい」と問いかけられたため、会話ができたことが嬉しいと伝えると受け答える形で「そうかそうか」と返事があり、その後に筆者自身に対する学業や就職、結婚、家族についての忠告をもらった。

「何かあったらじいさまばあさまご先祖様のおかげだ」と先祖供養を大切にすることも言われた。

具体的な注意もあり、「ろうそくがだらだらたれたらじいさまが泣いてよしてるなという気持ちでな、頑張ってくれ」「人がどわどわはずんだり、わいわい騒いだりしたら今日は何だかが起きるという気持ちでな...（中略）...外では気をつけなければならんという気持ちで頑張るようにするんだよ」「よくよくな、ふるまいした夢を見たときは何か不幸事災難事が起きてならんという気持ちで頑張きなさい」等を語った。

最後に人と支え合っていくこと、悪いことをしないこと、家族を大切にすること等を語り、命日・墓参りをしてほしいことを依頼し、「よく来てくれたありがとう。できるだけ長生きして頑張ってくれ」と言って、経文を語り、口寄せを終えた。

#### 4. 5. 4 口寄せ終了後

口寄せ後、イタコは仏様が喋っている間は普通の人になって、何を語っていたのか分からないためもし何を語ったのか分からない部分があっても分からない、と先に謝られた。また、謝礼については「あなたのお気持ちで」と言われ金額は指定されない。謝礼を支払い、一連の口寄せは終了する。



図8 イタコの自宅を示す看板（筆者撮影、一部個人情報のため加筆修正）この他に電柱等にも案内板が確認できた



## 5. 八戸市におけるイタコの観光資源としての活用事例

八戸観光コンベンション協会への聞き取り調査からイタコの観光資源として活用するに至るまでの経緯を紹介する。

1998、99（平成 10、11）年に東京ドームで開催された青森県の芸能や文化・物産などを紹介するイベント、「活彩あおもり大祭典」にて青森県内のイタコ 20 人ほどで口寄せコーナーを開設したところ行列ができるほど盛況であった。また、2010（平成 22）年 12 月に東北新幹線全線開通（八戸～新青森間）に伴い、イタコを市の観光資源として活用できないかと八戸観光コンベンション協会は模索していた。

4 章 5 節で紹介したように、イタコに口寄せしてもらうにはイタコの自宅に赴くか、3 章の通り恐山の祭りに合わせて訪れなければならなかった。また、イタコは常に恐山にいると考える人も多く、恐山に行ってみたのはいいもののイタコがいなかったため、八戸市観光コンベンション協会にイタコを紹介してほしいという問い合わせが常日頃、多数寄せられていた。

そこで、青森県の観光資源であるイタコを活用し、また八戸駅で観光客に下車してもらう動機付けとして八戸駅 2 階のはちのへ総合観光プラザ（観光案内所）での「イタコの口寄せ体験事業」を、試験的に 2009（平成 21）年八戸三社大祭（7/31～8/4）と盆期間（8/13～16）に実施した。この 9 日間で 148 件の申し込みがあり、



図 9 八戸駅におけるイタコ口寄せ事業で使用されていたのぼり（筆者撮影）

事業継続の要望も多かったため、そのニーズに応じて 10/2～4、10～12 の計 6 日間実施継続を行っている。この段階で八戸市観光コンベンション協会は平成 22 年の東北新幹線全線開業を見据え、八戸の通年事業としていきたいと位置付けている。

実施内容は、10～15 時で場所は八戸駅 2 階にある観光プラザ所控え室で行った（図 9）。基本的には八戸三社大祭と盆期間に時期を設定し、料金は 1 霊 10～15 分で 4500 円（イタコ 3000 円、必要経費 1500 円）であり、コンベンション協会の利益分は乗せていない。申込方法は電話による完全予約制で、1 日あたりイタコ 1 人で対応するため受付人数は最大 15 人程度であった。口寄せを求めて訪れた観光客の半数が青森県内からであり、残り半分は全国各地からであった。口寄せを終えた観光客に対しては、コンベンション協会側から観光案内をすることはなく、問い合わせがあると八戸市内の名所等を案内したという。

この事業を通して口寄せを八戸駅にて体験した人数は 2009（平成 21）年 7 月～2010（平成 22）年 2 月の計 24 日間で 404 件、平日に訪れる観光客に対応すべく、2010 年からイタコ側のスケジュールを押さえることと、口寄せ事業の実施を分かりやすくするために毎月 1～5 日をイタコの日と設定し、口寄せ事業を展開していた。その年の 2010 年 7 月～11 月は計 8 日間 398 件であった。2011（平成 23）年 6 月～10 月の計 30 日間で 329 件、2012（平成 24）年 6 月～10 月の計 30 日間で 319 件であった。そのため、2013（平成 25）年は計 9 日間の実施で 90 件であり、当初は八戸市内在住の 3 人のイタコに交渉・依頼し、交代で対応してもらっていたが、高齢により最終的には全員が出張による口寄せ事業を行わなくなってしまった。従って 2014（平成 26）年には実施されなかった（図 10）。

この八戸駅における口寄せを利用した人は「(亡くなった夫を呼んでもらって)自分がいなくなっても後はしっかりやれよと言われた。心が軽くなった」「駅の中なので新幹線を降りてすぐで便利」というコメントを寄せており（『東奥日報』, 2010）、利用者が満足している様子が窺える。

## 6. 現代を生きる八戸市のイタコの姿

現在における恐山と言えばイタコと連想するように、この両者は切っても切り離せない関係にあるが、実際には恐山菩提寺とイタコは修行を受け入れている等の関係はないことが分かった。イタコは商売の場として恐山に赴き、またそれを求める民衆が恐山を訪れることで恐山＝イタコのイメージが強調され、霊場としての恐山の位置付けがより強化されたと考えられる。また、かつては多くのイタコが恐山例大祭等においてイタコマチで口寄せを行っていたが、現在はほとんどその姿をみることができなくなった。これは、視覚障害を有した女性の職業選択肢がイタコ以外にも増えてきたためイタコになろうとする者が減ったこと、そして根本的に医療水準の上昇により視覚障害を有することが少なくなってきたとが考えられる。しかし、イタコを求めて東京から恐山を訪れていた方がいたことから、口寄せに対する需要は今日においても一定量存在していることが見受けられた。

また、イタコになるためには師匠に入門し、修行を積む必要があることを確認した。修行の最終段階である「師匠あがりの修法」の儀式は、霊を口寄せする巫女となるために必要な技量と素質を確認する、通過儀礼的な意味合いを有している。既存研究において、「口寄せ巫女と瞽女の弟子入り修行の形態や儀式に類似性がある。技能伝授は師資相承で、厳しい師弟制度がある」（鈴木、1973）とあるようにイタコと同じ女性

視覚障害で、三味線と唄を携え門付けして生活していた瞽女との共通性が指摘されている。今回、イタコは師匠の下で必ず修行をする必要があり、一定の年期期間を積んで技術を身につけ、一人前となる儀式の「師匠あがりの修法」を確認した。瞽女も必ず師匠に付いて三味線や唄の修行をする必要があり、一人前になるときに「年明きぶるまい」と呼ばれる儀式を催していたことが分かっている。このことから、より具体的なイタコと瞽女との共通点を確認することができた。修行を行い、技術を身につけた者が一人前となる共通点は視覚障害者が自立し、自身が身につけた技能をもって生計を立てていくためには欠かすことのできない要素だったと推察できる。

そして、八戸駅におけるイタコの口寄せ事業は、イタコに口寄せを依頼したいと願う人々は恐山の例大祭以外においてその機会はほとんどなく、イタコの自宅を訪ねることも抵抗感があったため足が遠のいていた。イタコの存在を知っていても口寄せしてもらう機会が多くなかったのである。

八戸市はそこに着目し、口寄せを八戸駅にて実施することでより利用しやすくし、口寄せを求める人たちのニーズに応える形をとった。同時に東北新幹線全線開業に伴う観光客誘致の一要素として、八戸市としてもイタコの口寄せを活用した。その結果として約1ヶ月の実施期間において300～400人の利用者が訪れた。

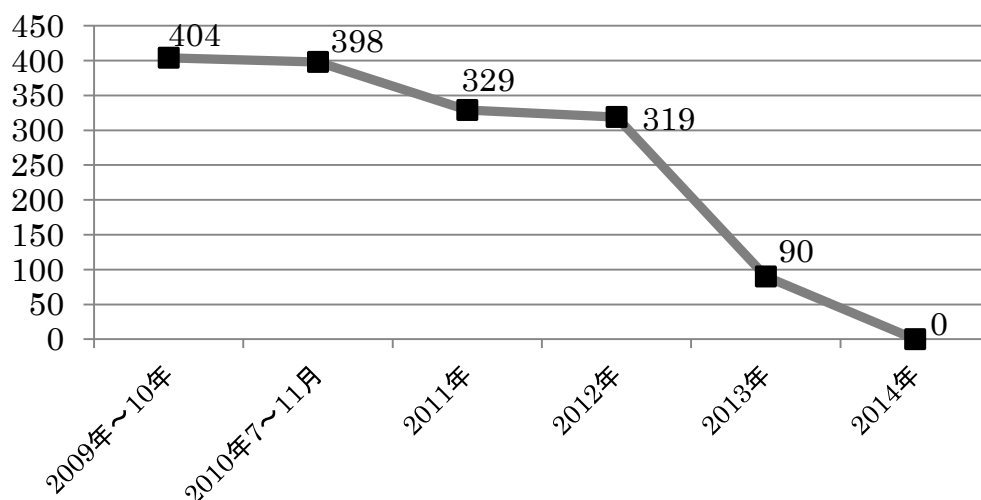


図10 八戸駅における口寄せ事業利用者数（八戸市観光コンベンション協会への聞き取りから作成）

この数字は今日における口寄せに対する関心の強さが反映されているものだと十分考えられる。イタコとしても商売する機会が増えるため悪い話ではなかったが、高齢のため事業継続は叶わなかった。イタコが直面している課題はまさにこの後継者問題であり、恐山にあがるイタコも 2014 年時点では 3 人しか確認できていないことから、イタコがいなくなってしまう可能性がより鮮明となった。

## 7. 今日のイタコに求められる姿

2011（平成 23 年）.03.11 の東日本大震災における遺族からの問い合わせが多かったのだが、口寄せは葬儀が終わり、百箇日が過ぎていないとできないため断った例があったという（八戸観光コンベンション協会の聞き取り調査）。

また、恐山には亡くなった親族の声を聞きたく東京から訪ねてきた人もいた。このように、イタコに口寄せを依頼する人々は親しい人を失ったことで生じる虚無感や喪失感を、埋めたいという思いを有していることは想像に難くない。

イタコが修行を積んでおこなう口寄せの台詞には、共通性や一種のストーリー性が確認されている（小林，1969）ため、一種の芸能としても捉えることができる。しかし、イタコの元に訪れる人々はイタコの口から出た言葉は故人その者の言葉として捉えたいがため、本当に口寄せされているかどうか以上に依頼側の「聞きたくても聞けなかった声を聞いている」という思いが叶えられている事実には大きな意味があると考え。実際、口寄せを体験したため、口寄せをした者の言葉だと思ってイタコの口から出る言葉を受け取っていくと誰しにも当てはまる内容であっても、深く心に響いてくるものがあった。求める側の思いを受け止め、それを満たすことがイタコの口寄せの役割なのだろう。まさにそれはカウンセリングの要素を有しているとも指摘できる。

また、イタコが八戸市において観光資源として活用されていた事実は、この時代においても

本来は不可能な死者と会話できることで得ることができる充足感と安堵感を提供できるといふ民衆を惹きつける要素を有しているからであると考えられる。

しかしイタコの人数は減少し続け、高齢化も進んでいる。その結果、八戸駅での口寄せも不可能となったのが現状である。新たなイタコの誕生を期待すると同時に、イタコが持つ価値を再認識していくことがより一層求められる。

## 謝辞

今回の調査にあたり、八戸市観光コンベンション協会、はちのへ総合観光プラザ、蓮華庵従業員の皆様、イタコ利用客の方々には聞き取り調査にご協力いただきました。また、八戸市図書館、八戸市図書情報センターには文献調査にご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 小林栄（1967）「イタコと恐山：イタコの口寄せ物語」神學研究 16, 74-106
- 小林栄（1969）「イタコと祭り」神學研究 17, 177-211
- 鈴木昭英（1973）「瞽女の民間信仰」日本民俗学 (85), 1-1
- 青森県（2001）『青森県史民俗編資料南部』354-360 810p
- 加藤敬（2003）『イタコとオシラサマ-東北異界巡礼』学習研究社 235p
- 青森県（2007）『青森県史民俗編資料下北』320-325 780p
- 鈴木昭英（2009）『越後瞽女ものがたり一盲目旅芸人の実像』岩田書院 120p
- 南直哉（2012）『恐山-死者のいる場所-』新潮新書 208p
- 松田広子（2013）『最後のイタコ』扶桑社『デーリー東北』1972.07.28
- 『岩手日報』1988.12.27
- 『デーリー東北』2000.07.21
- 『東奥日報』2010.07.03